

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	古矢篤史
論文題目	横光利一の〈長篇小説〉に関する研究 一九三〇—四〇年代の〈日本〉をめぐるメディアとテキストの展開
<p>審査要旨</p> <p>申請者の古矢篤史氏は、昭和時代前期に活躍した作家・横光利一（1898～1947年）が1930～40年代に連載した長編小説を、掲載された媒体とのかかわりのもとに再検討し、それが日本主義とどのように関連するかを解明しようとする。申請者は、近年1930～40年代が中心的に論じられる横光利一の研究に、以上のような新たな観点から一石を投じようと試みた。</p> <p>この時期の横光は、それまでの文芸雑誌・総合雑誌に加えて、新聞・婦人雑誌にも長編小説を連載するようになった。そのこともあって、「文学の神様」と称され、民衆の愛読者も増加する。本論文では、『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に連載された「旅愁」「家族会議」をはじめ、1930～40年代に発表の長編小説を主な分析の対象としながら、掲載された媒体との相関性の分析が展開される。多くの読者をもつ新聞・婦人雑誌などのマス・メディアに連載した小説が同時代の日本主義とどのように関連し、作中で日本がいかに表象されているかを解明しようとするところに本論文の特色がある。本請求論文は、すでに学界で評価を得ている、査読付き学術誌に掲載の論考を含む9章と資料紹介から、構成されている。</p> <p>以下、各部各章の達成点を示す。</p> <p>「第一部 一九三〇年代における新聞メディアの発展と〈長篇小説〉の成立」では、1930年代における〈長篇小説〉成立の歴史的背景を検証しようとするべく、以下の二章から構成される。</p> <p>「第一章 「純粋小説論」と一九三〇年代における〈長篇〉の成立—新聞・婦人雑誌メディアの発展とマルクス主義退潮期の〈民衆〉思想—」では、新聞・婦人雑誌の読者が〈民衆〉としてイメージされると同時に、〈民衆〉の思想がマルクス主義の後退した時代における日本主義＝ファシズム的動向とは対立する性格であったことを論証した。続く「第二章 「家族会議」—新聞メディアの発展と〈長篇小説〉における〈民衆〉意識—」では、新聞というメディアとその〈長篇小説〉における〈民衆〉思想の形成について、「家族会議」を分析することでその実態を明らかにした。</p> <p>「第二部 戦間期の〈長篇小説〉と〈日本〉言説の展開」では、横光の〈長篇小説〉の試みが、ファシズム＝日本主義に批判的である一方で、保田與重郎らのイロニーとしての〈浪漫〉とも性質を異にしていることを論証するために、以下の4章から構成されている。「第一章 「上海」—言語都市〈上海〉とその〈日本〉をめぐる表象の歴史性—」では、長篇小説「上海」をとりあげ、言語都市としての〈上海〉を通じた〈日本〉表象が、それぞれの歴史的局面とともに異なる文脈で生成された過程を分析した。「第二章 「紋章」—事变下の〈日本精神〉言説と浪漫主義的自己遡及からの〈自由〉—」では、長篇小説「紋章」を「日本精神」という同時代に流行した言説と関連づけながら考察した。「第三章 「欧洲紀行」—〈長篇〉化するテキストと〈日本〉のヒューマニズム的現前—」では、紀行文集「欧洲紀行」がまとめられる際に働いた〈長篇小説〉の力学を検証した。「第四章 「旅愁」—一九三七年における「日本的なもの」とその先験への問い—」では、『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』両紙に掲載された新聞連載の『旅愁』を中心に、一九三七年の「日本的なるもの」をめぐる議論との同時代性を再検討した。</p> <p>「第三部 戦中・戦後の〈長篇小説〉と〈日本〉言説の転回」では、「日支事变」以後、戦時下においていかなる〈日本〉表象の転回が見られたかを考察することを目指し、以下の2章で論を展開した。「第一章 「旅愁」—戦時下における「世界史」との交錯—」では、日中戦争開戦後に</p>	

連載が再開された『旅愁』の単行本化にともなう改稿過程に検討を加え、そこに入り込む「東洋」という視点の内実を探った。「第二章 「旅愁」—アジア・太平洋戦争下における「座標軸」の転換—」では、東洋と西洋という思想的枠組が、アジア・太平洋戦争開戦において失効し、古神道とカソリックの主題へと転回する過程を考察した。「第三章 「夜の靴」—最後の〈長篇小説〉とその「真一文字」の〈日本〉言説—」では、「夜の靴」に見られる〈日本〉表象の読み直しを行った。

「附録 新資料紹介—『定本横光利一全集』未収録作品—」では、三つの全集未収録の資料を紹介し、解説を付す。あげられている資料は、随筆「フランスの絵」、「『女性の幸福』を考へる」、「日本科学の母胎について（対談科学時評）」の三編であり、いずれも今後の研究に示唆を与える資料となるであろう。

これまで述べてきたように、1930～40年代の横光利一に新たな視点から切り込んだ本研究は、博士学位請求論文として充実した成果を示したものと見える。この時期の横光を研究するうえで、今後、請求者の論文は多くの研究者に参照されるだろう。

一方、審査委員会において、審査委員から様々な課題が提示された。主要な概念の規定をより明確にすると同時に、テキストの分析をより精密にする必要がある。メディア論、思想史に関連する研究をより深化させていくことが望まれるが、特に本論文後半においてはメディアとのかかわりについての言及が不可欠となる。他にも有益な今後の課題が、少なからず提出された。

以上の課題は、申請者の今後の研究をさらに発展させるうえで、重要な指針を与えてくれるだろう。

申請者の論文は、横光利一研究に新たな展開をもたらす、良質な成果であると判断される。よって、審査委員会は、本請求論文が「博士（文学）」の学位授与に値するものと認定する。

公開審査会開催日	2015年 3月 24日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	専門分野	氏名
主任審査委員	早稲田大学教授	博士(文学)早稲田大学	日本近現代文学	十重田裕一
審査委員	早稲田大学教授	博士(文学)早稲田大学	日本近現代文学	中島国彦
審査委員	早稲田大学教授		日本近現代文学	高橋敏夫
審査委員	早稲田大学教授		日本近現代文学	宗像和重
審査委員	早稲田大学教授	博士(文学)早稲田大学	日本近現代文学	鳥羽耕史
審査委員	東洋大学教授		日本近現代文学	石田仁志